



湧水保全の必要性を訴えられた秋篠宮さま
＝ スイートピアセンター（大垣市室本町） 写真：岐阜新聞提供



写真：大垣市提供



国土交通省中部地方整備局
木曽川上流河川事務所
揖斐川第二出張所



八幡神社「大垣の湧水」（大垣市西外側町）

湧水保全フォーラム全国大会 in おおがき

『湧くわく水都の未来を考える！』 秋篠宮さまご出席

湧水の魅力や恵み、保全活動の事例など報告する、「湧水保全フォーラム全国大会」が10月27日（月）、大垣市内で開かれ、揖斐川第二出張所も参加させていただきました。実行委員会の主催で、今年で7回目の開催。行政や市民団体の関係者ら約300人が参加し、秋篠宮殿下ご臨席のもと、保全に何が必要かを考えました。

挨拶に立った小川敏・大垣市長は「水都『大垣』は豊富で良質な地下水によって街が発展してきた。21世紀は真水の時代とも言われている。貴重な水資源を保全し、どう活用していくかを考えるきっかけになることを期待したい」と挨拶。秋篠宮殿下からお言葉を賜り、国土交通省の足立敏之顧問が「水循環を考える」をテーマに基調講演が行われました。

足立氏は「地球温暖化により、今世紀末には3～5℃気温が上昇する見通しであり、これに伴って洪水や渇水などの自然災害が増発し、水循環系に対して大きな影響が生じる」と警鐘。本年3月に水循環基本法が成立し、健全な水循環の維持・保全に向けて政府一丸となった取り組みが始まったことを紹介した上で、「防災・水循環のいずれも流域全体のことを多面的に考える視点が重要。そのためには、目標の達成度を検証しながら進めていくことや、関係機関とのパートナーシップと将来の担い手をつくる必要がある」と訴えました。



基調講演を務めた国土交通省・足立敏之顧問
写真：岐阜新聞提供

- 基調講演に続いて、湧水保全に関わる全国の取り組み事例として、岐阜県立大垣東高等学校が8年前から継続的に取り組んでいる海津市南濃町津屋地区での絶滅危惧種「ハリヨ」の生態調査や、山形県の地元小学校や高等学校が総合学習の一環で進めている絶滅危惧種「イバラトミヨ」の環境保全活動、また、福井県大野市の地下水保全活動など、全国の5事例の報告があり、来場者から盛大な拍手が贈られました。



パネルディスカッションに臨んだパネリストの皆さん
写真：岐阜新聞提供

- その後行われたパネルディスカッションでは、岩手県大槌町の佐々木健・生涯学習課長は「湧水は地域の貴重な資源である。今後、震災復興に湧水を活かしたまちづくりに取り組んでいきたい」と抱負を述べ、鳥海山「おもしろ自然塾」推進協議会の鈴木康之副会長は「子供達によるイバラトミヨの環境保全活動が地域の愛を育み、地域力を高める教材となっている。将来を担う子供たちが活躍する場をもっと増やしていくために、大人が積極的に関わり仕掛けていくことが必要」と訴えました。

また、地下水保全活動に取り組んでいる福井県の大野市長や、水源地域にあたる岐阜県の下呂市長、郡上市長らが来場し、「湧水に起因する山の水源涵養こそが、豊富で良質な地下水を生む。適切な森林保全に向け、我々は国と連携し全力で取り組む必要がある」と発言。

- コーディネーターを務めた湧水保全フォーラムの森誠一・代表世話人は「良好な水循環に向け、関係者による広域かつ継続的な活動により、地域の貴重な財産である湧水資源を保持していく必要がある。水無くして国の発展なし。地域の特性を生かし、若い担い手も育てつつ、郷土力を高めていくことこそ、持続可能な国づくりに繋がるはず」と語り、最後にドイツの哲学者ニーチェの言葉を引き、「足下を掘れ、そこに泉あり」※を紹介し、同フォーラムを締めくくりました。

※ 「人は大抵、自分の足下（あしもと）なんかには、大した物は埋まっていないと思うもの。しかし、灯台下暗し、素敵なもの、価値あるものは自分の身近なところにある。自分の身の回りを注意深くじっくり観察してみる。普段見落としていた価値あるものが見つかるはず。そして足下を掘ってみる。きっと、黄金の泉が湧き出てくるはず。」という意味。

■ポスター展示 市民団体、事業者、自治体等による湧水保全等に関わるポスター展示が開かれました



湧水保全活動を紹介したパネルの展示状況（左）と、来場者に説明する木曽川上流河川事務所河川環境課の後藤さん（右）